

庵寺山古墳周隴調査の記録

庵寺山古墳周隴調査の記録

昭和 51 年 6 月 30 日 印刷

昭和 51 年 7 月 5 日 発行

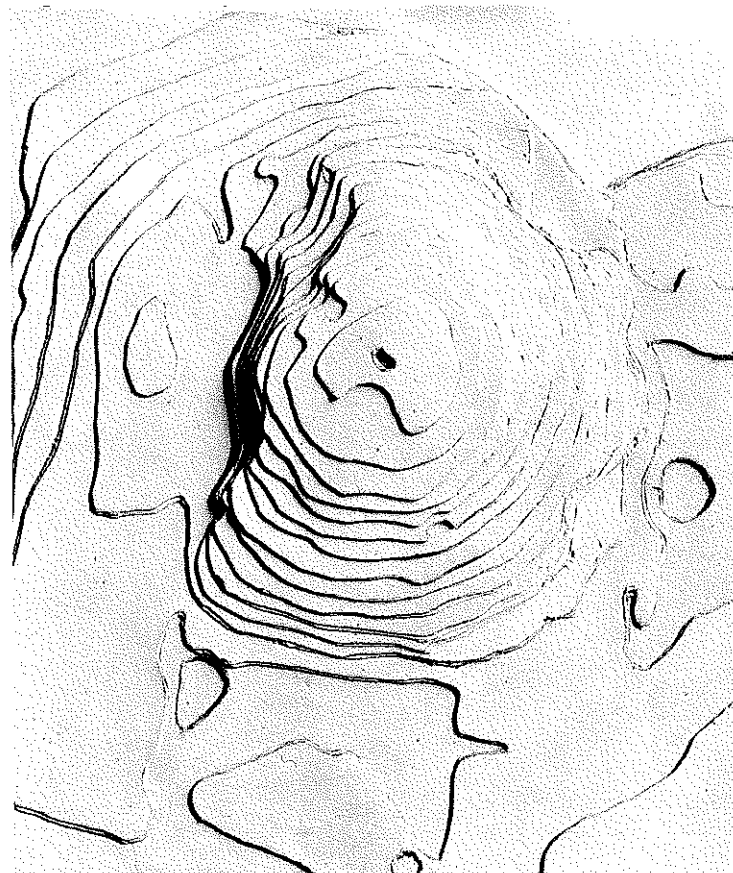
発行者 庵寺山古墳周隴調査会

印刷者 黒山写真工芸印刷所

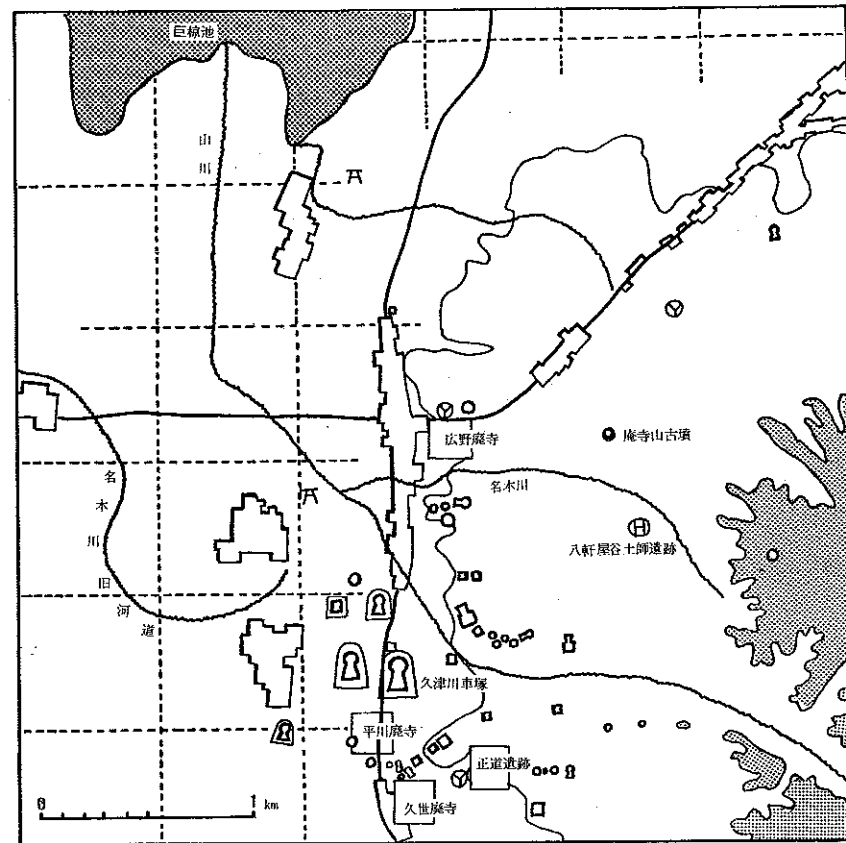


1976

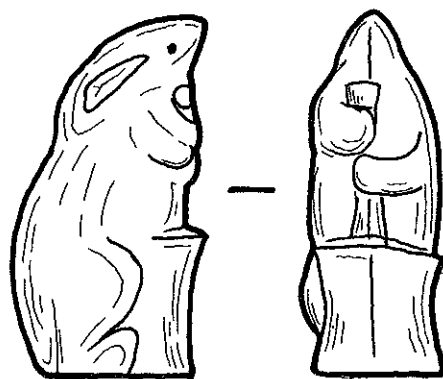
庵寺山古墳周隴調査会



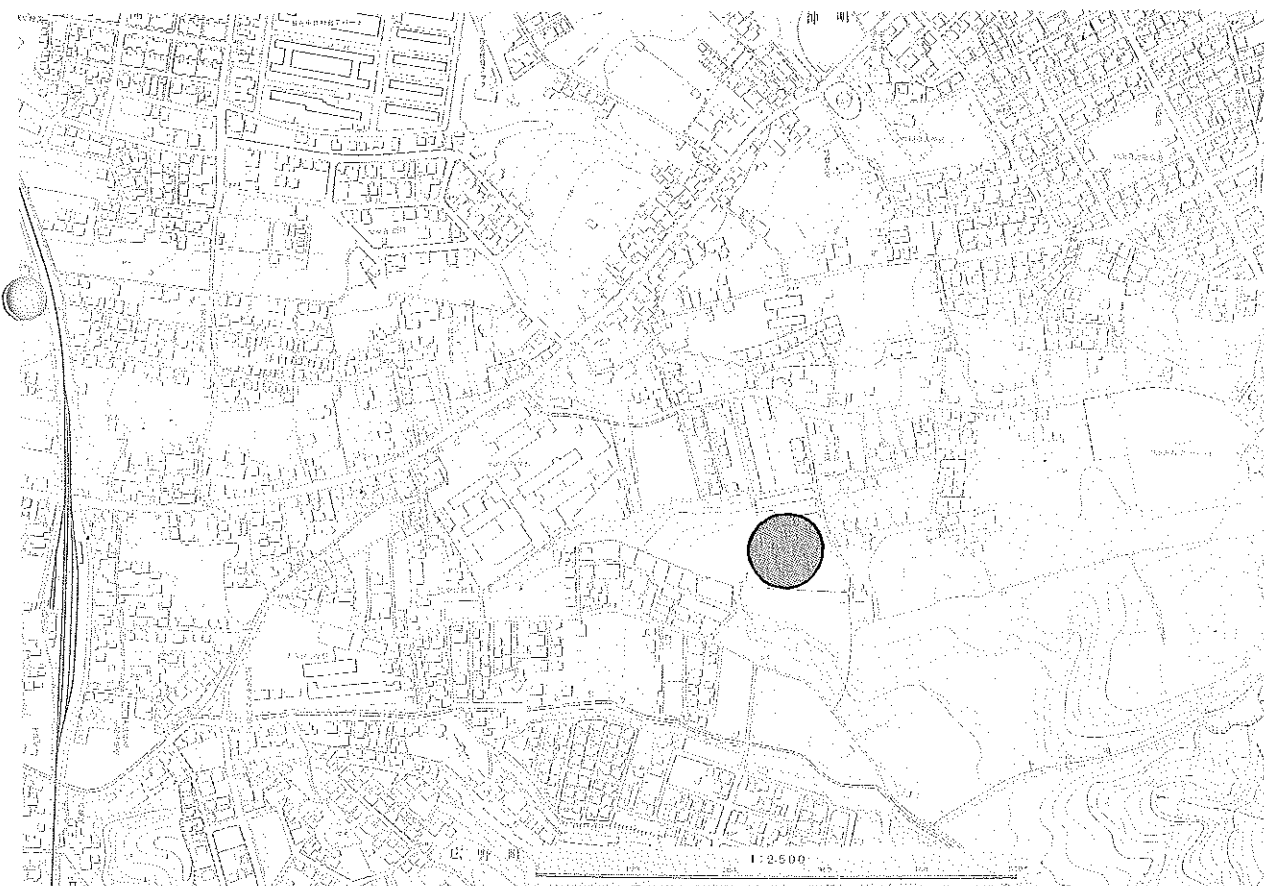
庵寺山古墳模型



庵寺山古墳の考古学的環境



表紙 保存された現状(北より遠望)



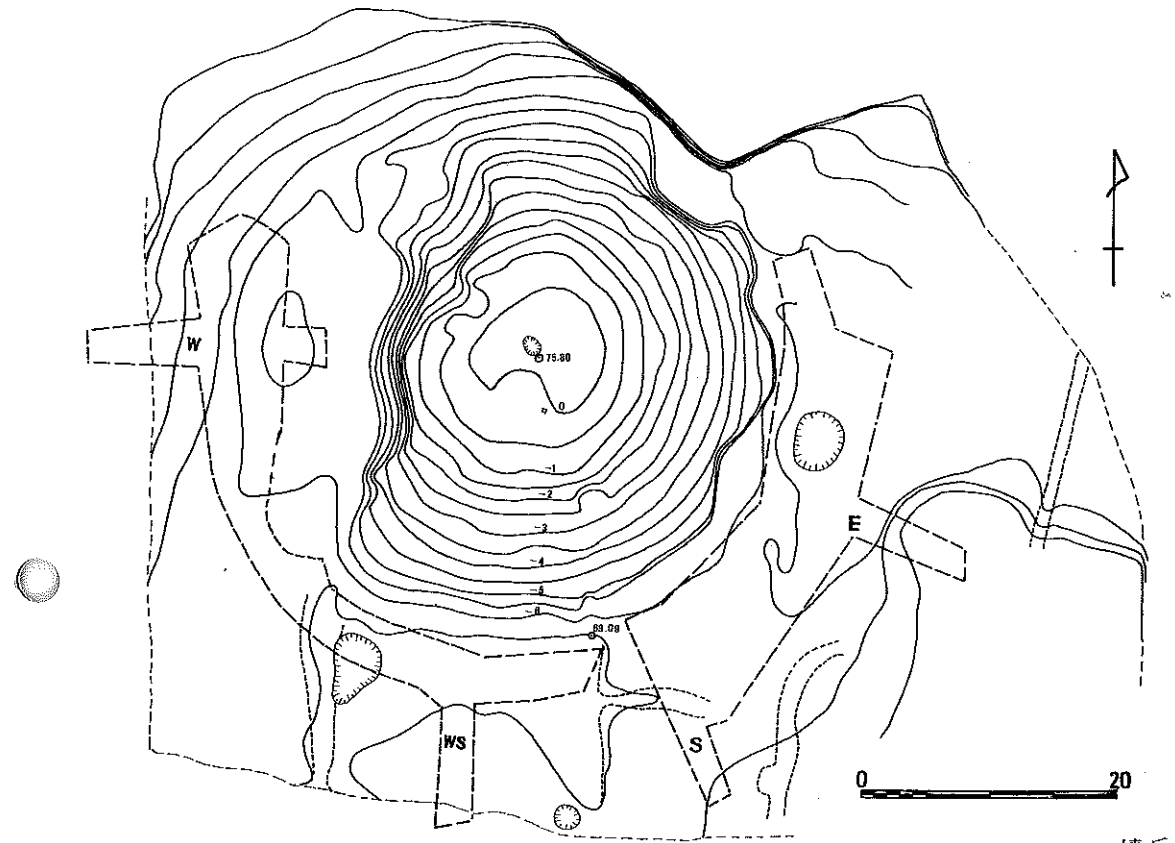
庵寺山古墳周辺の地形図



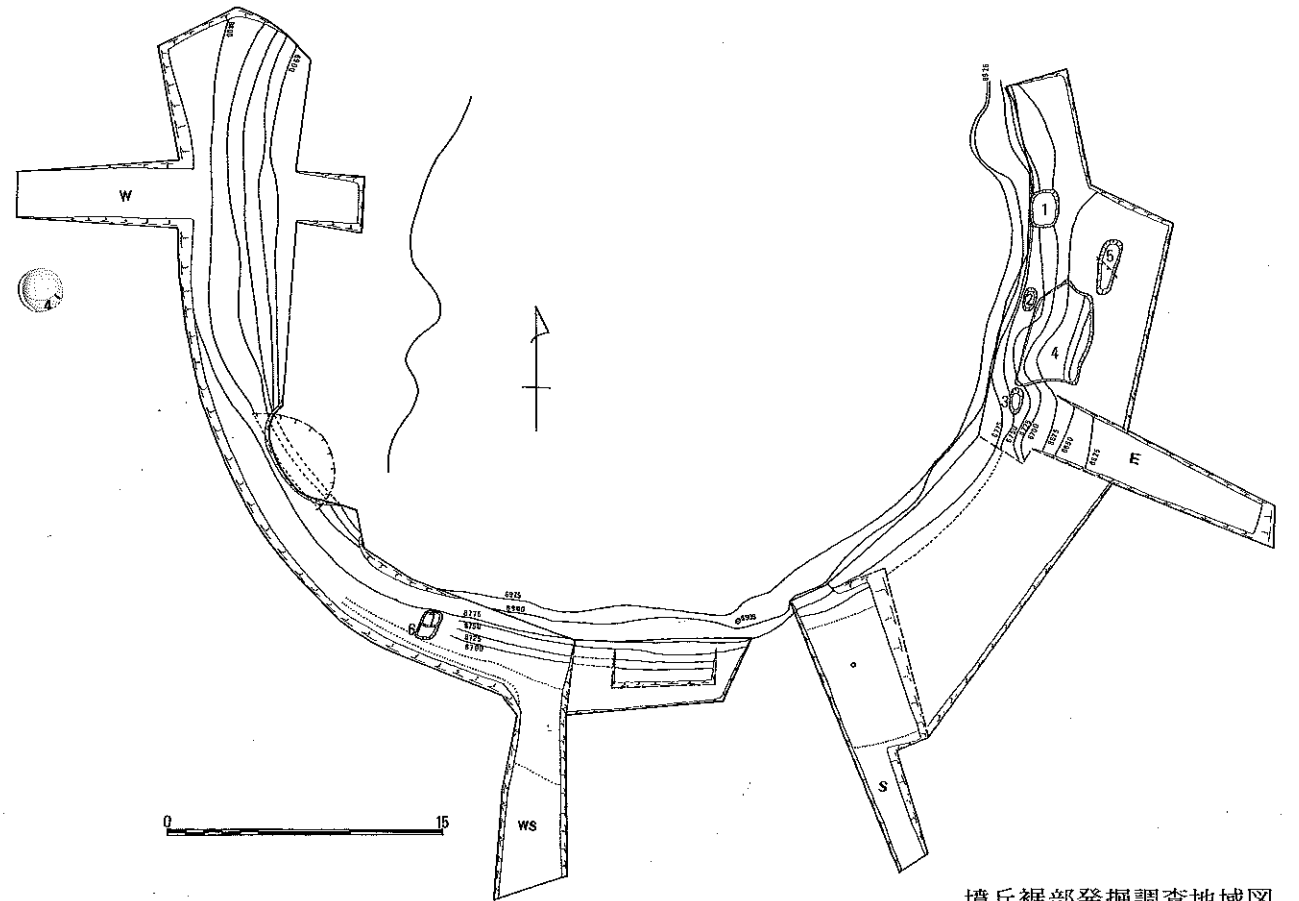
庵寺山古墳外景（南東より遠望）



庵寺山古墳外景（西より遠望）



墳丘実測図



墳丘裾部発掘調査地域図

はじめに 庵寺山古墳は昭和3年8月31日に大蔵省より当時の大久保村へ墓地として払下げられ、昭和26年、東宇治町・宇治町・槇島村・小倉村・大久保村の2町3村の合併による市政施行に伴ない、宇治市の行政財産となったものである。その後、昭和39年6月15日に零細財産処分のため、宇治市から民間に払下げられた。

庵寺山古墳が位置する宇治市広野町丸山一帯は、かつて三軒屋とよばれ竹藪の丘陵地に民家が点在する程度であったが、昭和30年代後半より宇治市が京都・大阪のベッドタウンとして宅地化が進行し、庵寺山古墳のすぐ北側まで家が建ちならびやがて同古墳そのものにも宅地造成の波をかぶることが予想された。このため、庵寺山古墳の買上げについての請願書が昭和43年3月1日、宇治市大久保北ノ山 森忠次氏他9名より市議会に提出され、昭和43年7月13日採択されている。

今回、小林建設株式会社外4者の広野団地造成計画が具体化し、昭和49年2月、開発行為施行についての協議願が宇治市に提出された。計画によると、庵寺山古墳の墳丘そのものは造成計画内か

らはずされるが墳丘のまわりに周隴の存在が予想されるので、周隴保存のため計画変更を宇治市と施主との間で協議が重ねられた。しかし、道路計画大幅な変更が技術的に困難であった。そこで、周隴の有無を科学的に確認するため、宇治市は施主に発掘調査を行うよう要請した。施主も古墳の重要性に理解を示され、原因者負担による発掘調査を早急に行うことになった。造成計画は調査予定区域をはずして先行申請し、調査終了後この区域の申請を提出することになった。

宇治市教育委員会は宇治市文化財保護委員会に計画と経過の報告を行い、あわせて計画に対して意見を求める諮問を行った。そして古墳は現状を保存されたい。今後、周隴の調査をまって意見を述べたいとの答申を受けた。

昭和50年3月、調査担当者・土地所有者の承諾書を得て、工事に伴う発掘届を提出した。かくて「庵寺山古墳周隴発掘調査会」をつくり、昭和50年7月29日より8月15日まで発掘調査を実施した。**位置と環境** 本古墳は行政的には京都府宇治市広野町丸山にあって、地形的には宇治丘陵の名でよ

ばれる洪積台地上に立地する。庵寺山古墳の東南山頂には久津川古墳群の発生期に築造されたとと思われる宇治一本松古墳があり、この古墳と庵寺山との間には古式土師器を出土した八軒屋谷遺跡がある。

八軒屋谷より流れでる名木川沿いには庵寺山古墳をはじめ、谷口の北側丘陵上に一里山古墳、南側には金比羅山古墳、坊主山1号墳、同2号墳があって久津川古墳群の北辺の一支群を形成している。また名木川の谷口には広野廃寺があり、遺構は明らかでないが、川原寺式の軒丸瓦をはじめ奈良期の文様瓦を出土し、古墳から寺院跡に続く遺跡群として注目に値する。

文献上からは「倭名抄」にみる久世郡那紀郷の地域と考えられ、「東大寺奴婢籍帳」にみる水尾君や「姓氏録」の奈癸勝などの古代豪族の居住した地域と考えられる。

古墳外形の現状 墳丘の周辺および墳丘の南から東斜面は竹林で、北斜面と墳頂部は雑木と竹が混じっている。墳丘の西斜面は墳頂より約2m下った付近まで筒栽培の土取りで削除されて高さ2m

の急崖となっている。この崖の下には江戸中期頃の古墓がある。

墳丘の東側の裾部は筒栽培の土入れや住宅建築の壁土用に採土されて1mから2mの崖をつくっている。露出面の表土層には礫層がみられ、葺石の存在が観察される。墳丘の北側も数年前の宅地造成の際に削除されて3mから5mの垂直な急崖となっている。

1973年に城南高校地歴部の岩崎恭典・小笠原義治君等によって測量された時の観察によると、墳丘下部の等高線が直線状に近いので、一辺約40mの方形基壇の上に直径26mの円形の墳丘がのる高さ約6.5mの墳丘ではないかと観察された。墳丘の下部が方形になるか円形になるのか発掘調査以前はどちらとも判断できなかった。

墳丘西半分を除く墳丘は比較的良好に原形が保存されているが、墳頂中央には数年前より直径約1.5mの盗掘窟があげられてその底は粘土層にまで達している。



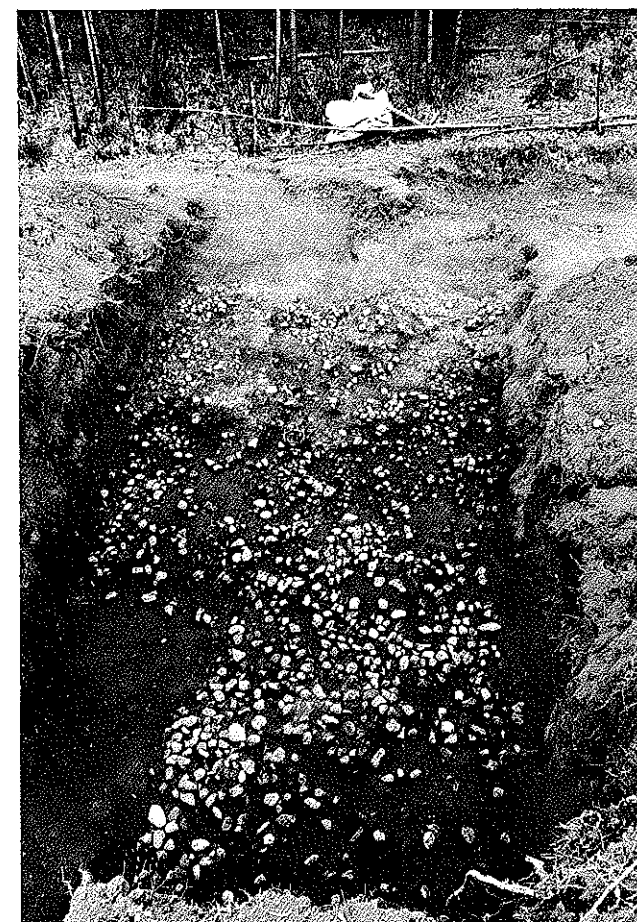
発掘調査中



墳丘裾南部

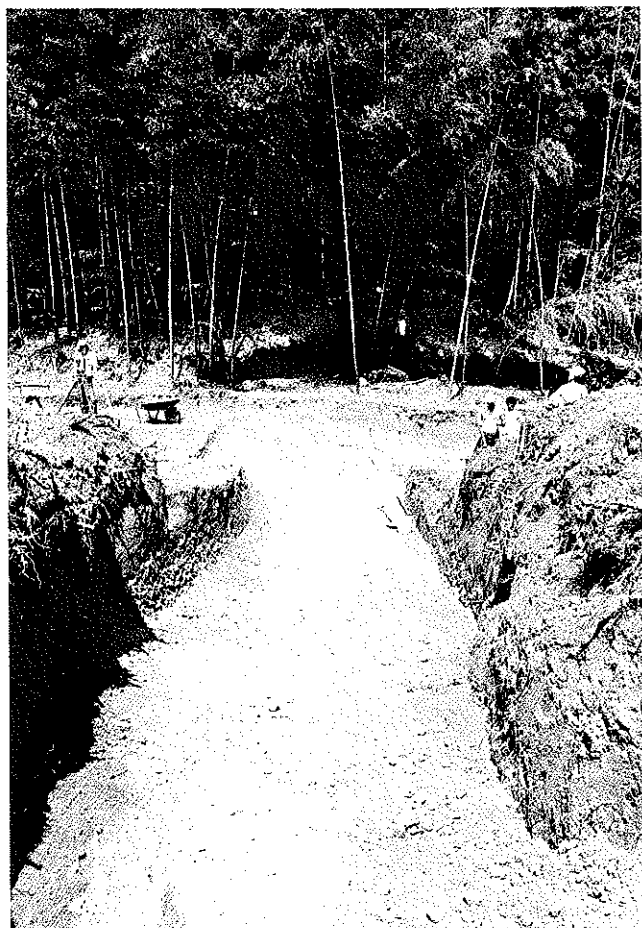


墳丘裾東部



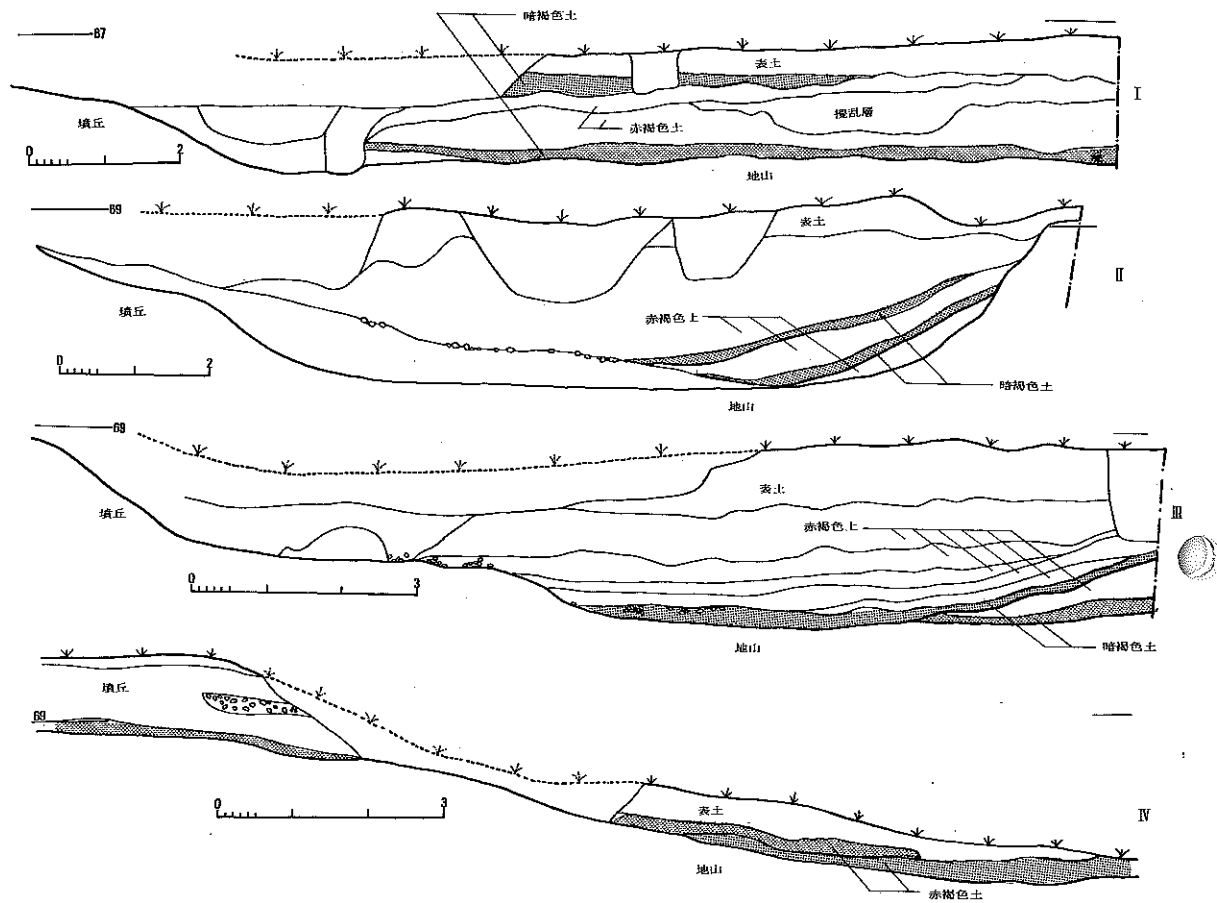
S
ト
レ
ン
チ

墳丘裾(南部)

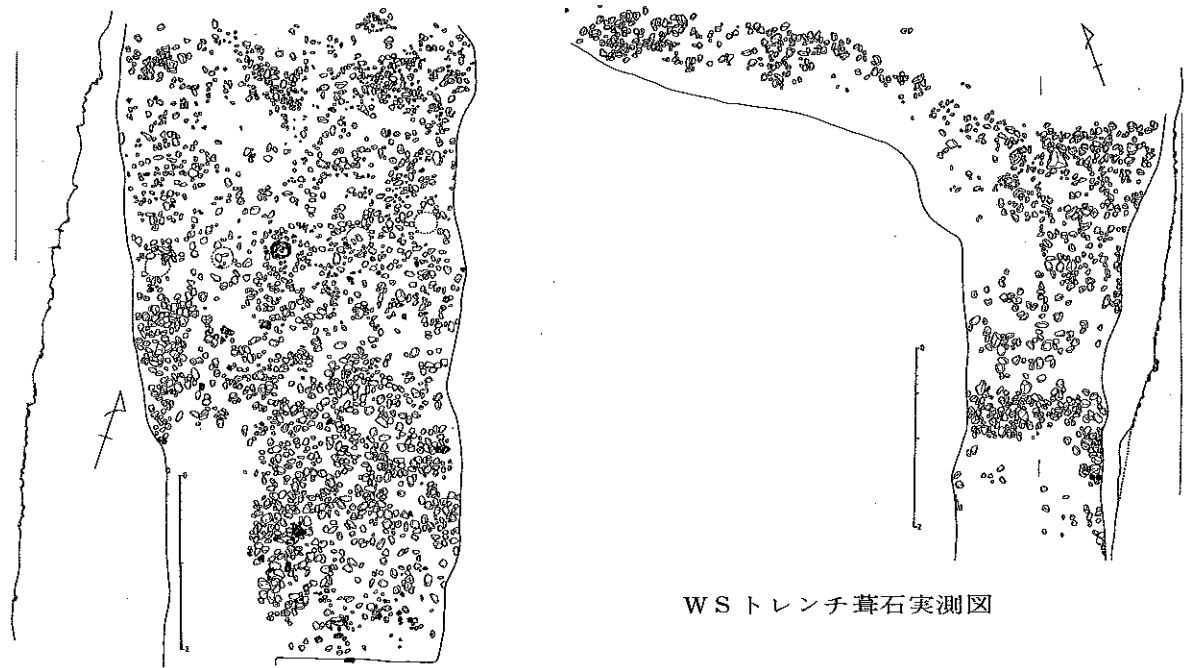


E
ト
レ
ン
チ





周隴断面図 (I Eトレンチ II Sトレンチ III WSトレンチ IV Wトレンチ)



S トレンチ 葺石実測図 (斜線は埴輪)

WS トレンチ 葺石実測図



葺石の現況



埴輪の出土状況



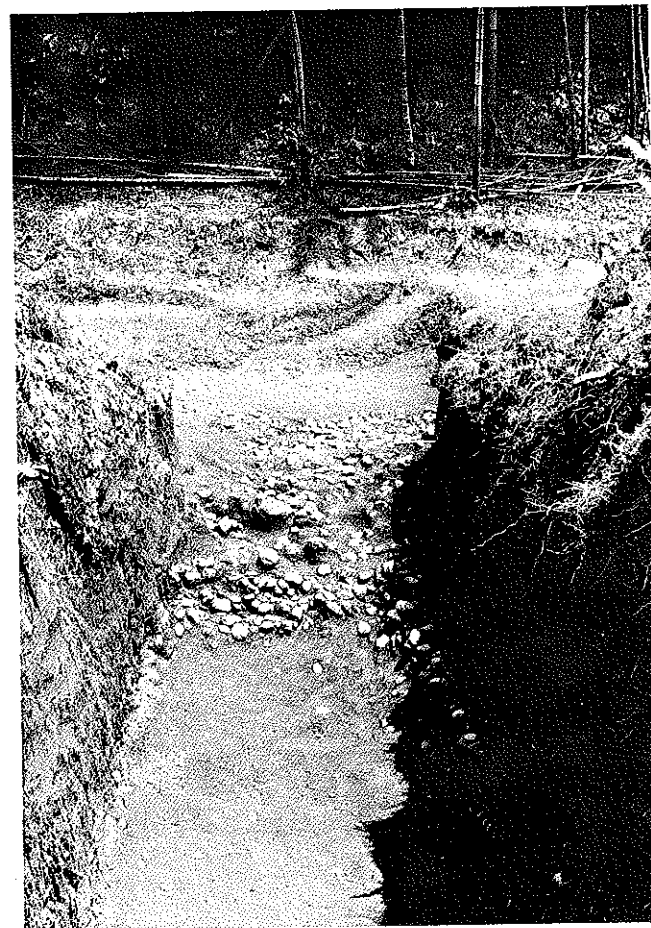
原位置を保つ円筒埴輪



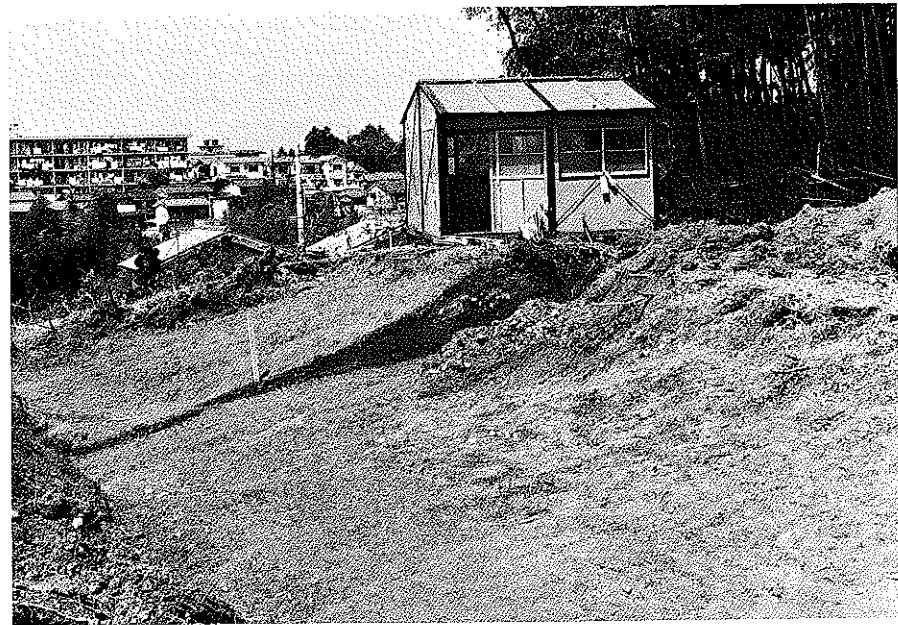
葺石と埴輪の破片



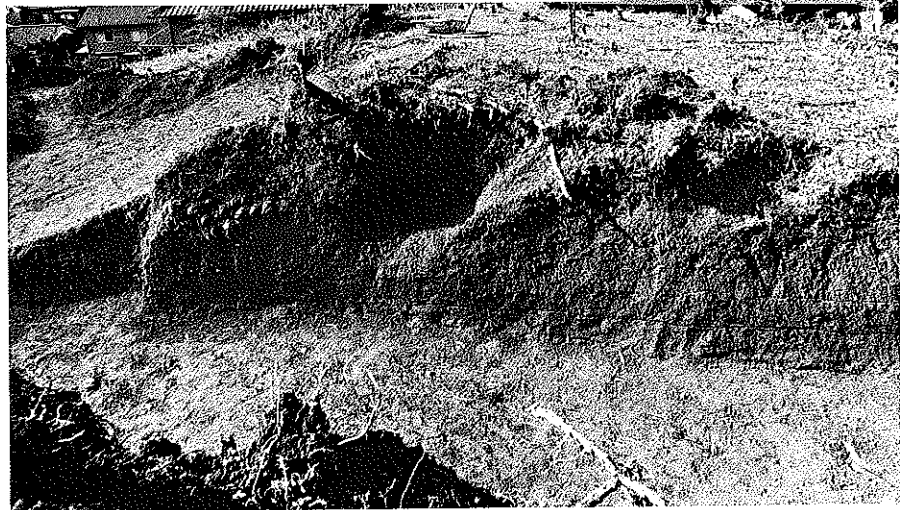
WS トレンチ 断面



WS
ト
レン
チ



墳丘裾西部



Wトレンチ (墳丘裾)



Wトレンチ断面

周陰部の調査 所有者が異なり、保存される墳丘部の境界に沿って幅約8m程表土をはぎ、墳丘基底部の検出を行った。さらに周陰検出のため墳丘の中心より放射状に南部に2本、東部に1本、西部に1本のトレンチを設定して南部をS、WSトレンチ、東をEトレンチ、西をWトレンチと呼称して発掘調査を実施した。

Sトレンチ 南部地区の調査のため墳丘中心より南南東に向って幅2m、長さ15mのトレンチを設けて発掘した。その結果、トレンチ北端の表土下層の墳丘に沿った地点より、南の最深部で地表下1.8m、幅7mの墳丘裾をとりまく葺石があった。

葺石は拳大の円礫を使用し、南端は何の施設もなく、一重に石の大小にかかわらず敷きのべであった。石の表面は約9度の傾斜をなしている。葺石の中央には原位置を保つ円筒埴輪の基部が1個遺存していた。他の埴輪は認められなかったが50~60cm間隔で葺石のない空間があり、付近に円筒埴輪や形象埴輪の破片があり、埴輪列の存在した可能性が考えられる。

トレンチ東壁にみる断面の土層は次の通りである。表土層は40cm前後で墳丘裾になるほど厚く、陶磁器や平瓦の破片が混入している。第Ⅱ層は葺石の直上まであって厚さは1.4mを測る。底部はU字状に南北両端が浅くなり、葺石の南端が最も深い。第Ⅲ層は葺石南端より南にあって葺石の傾斜とは対症的にU字状に上昇する厚さ約10cmの暗褐色粘質土層である。第Ⅳ層は厚さ45cmから20cmのやや粘質の赤褐色土層である。第Ⅴ層は第Ⅲ層と同じ暗褐色の粘質土で厚さ10~15cmをなし地山に沿って堆積している。

地山は荒砂質土で墳丘基底部は地山を削り出して築造されており、特に墳丘裾は高さ1m、幅1.5mが段築状に削りだされ墳丘の端と思われ、その

外側は幅14.5mのU字状の掘りこみとなる。この掘りこみの墳丘裾には葺石を敷き円筒埴輪を樹立させている。東壁断面にみる第Ⅲ層が葺石と対症的に上昇することからみれば幅11m、深さ1.1mの空濠の存在したことが観察される。空濠の底は標高66.80mを測る。

WSトレンチ 墳丘中心からほぼ南に向って、幅約3m、長さ13mのトレンチを設け、WSトレンチとした。このトレンチ内も墳丘裾部の北端から南へ約5mまで直径10cm前後の葺石が無秩序に敷き詰められていた。葺石の南端から1m内側付近には形象埴輪や円筒埴輪の破片がみられたが原位置を保つものは認められなかった。

トレンチ東壁の土層は約70cmの表土層があり、第Ⅱ層は約1.4mの赤褐色の堆積土で、この層は砂質と粘質によって4層に分けることができ、葺石の直上まで堆積している。第Ⅲ層はトレンチ南半部にのみみられる約10cmの暗褐色粘質土であり、地山の直上にある第Ⅴ層も同様な暗褐色粘質土層で、両者の間には赤褐色粘質土の第Ⅳ層がはさまっている。

このトレンチでも地山を削りだして墳丘裾とし、段築状の基底部をなしている。ここよりU字状に幅約14mほりこんでいる。第Ⅲ・第Ⅴ層の暗褐色土層の存在からみれば、幅9mの周陰が存在したと考えられる。

Wトレンチ 墳丘の西側は筒栽培のため墳丘は切り崩され、裾部は基壇状の平坦な地形をなしている。地形測量と表土をはいで調べた結果は基壇状地形の西端が本来の墳丘の裾であることが認められた。

墳丘裾を中心に基壇状地形の上に4m、下に10mの東西方向を向くトレンチを設定した。トレンチ内では葺石は認められなかったが、切取られた



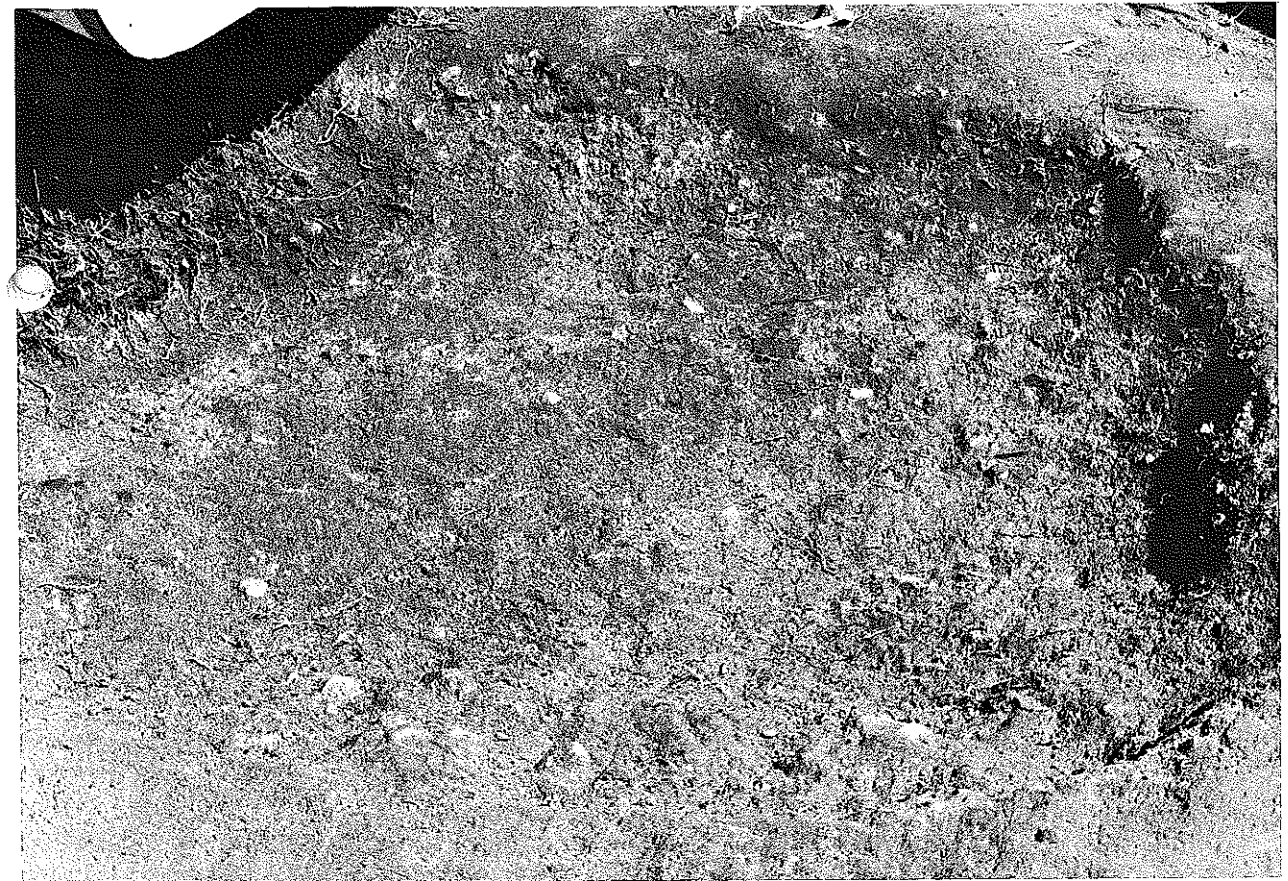
近世墓



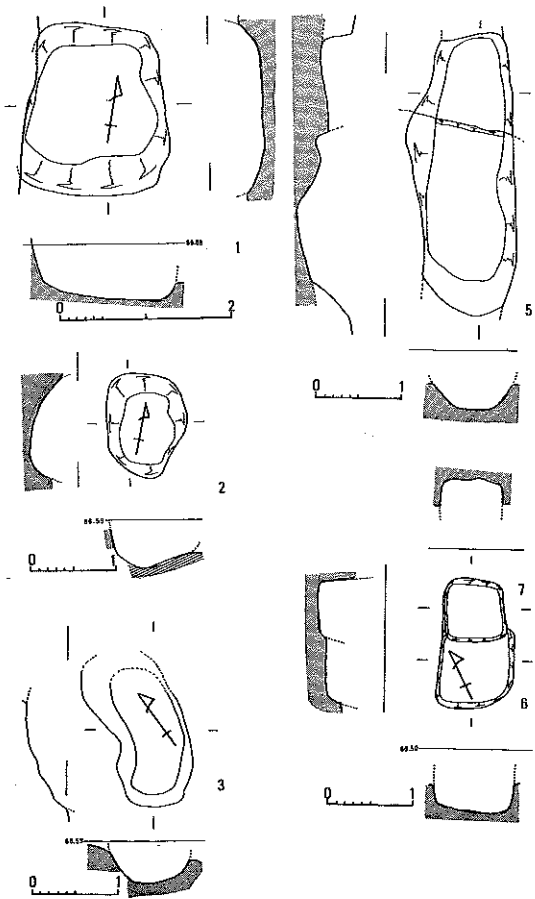
東部墳丘裾のピット群



近世墓関係遺物



No.1ピット



近世墓遺構 (5は溝跡)

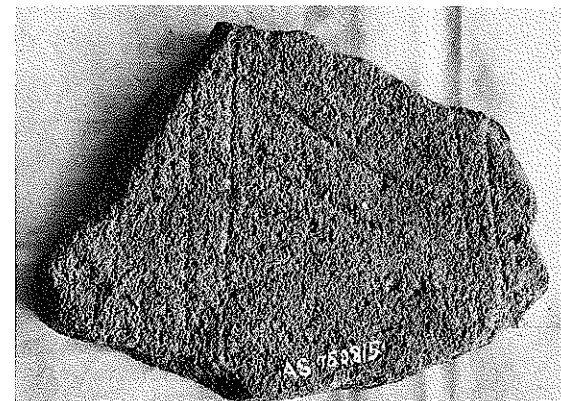
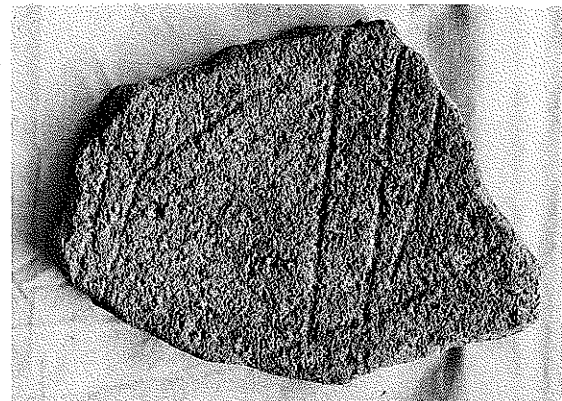
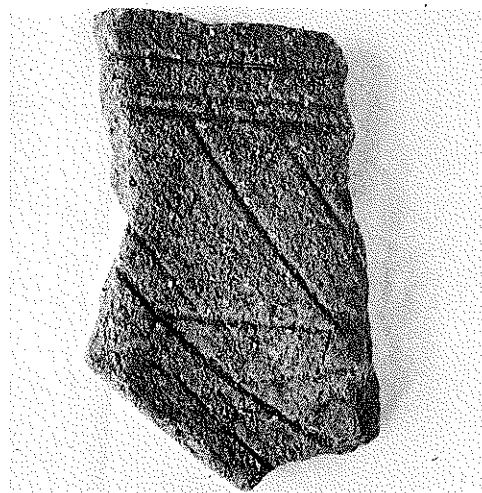
土壇状地形の西端には礫の堆積があり、本来はここにも葺石の使用があったものと思われる。トレンチ北壁で土層を観察すると、東側の土壇状地形は地山の上に約20cmの赤褐色土層があり、その上に10~20cmの暗褐色土の堆積がある。この上にある赤褐色土層は盛土である。墳丘南半部は地山を削りたして墳丘基底部をつくっているのに対し、北半部は盛土によって構築された可能性がある。

トレンチの西半部では表土の下の第Ⅱ層は厚さ15cmの暗褐色土でほぼ水平に約3.6mと西へ続いている。第Ⅲ層も暗褐色土で第Ⅱ層の下から西へ7.7mとのびている。WトレンチではU字状の周隍の跡は認められない。しかし、第Ⅱ・第Ⅲ層の暗褐色土層が存在することをみれば、墳丘西側は幅約10mのテラス状の地形をなしていたとみられ、南部地区の周隍に対する墳丘の外側の一種の施設であったと思われる。

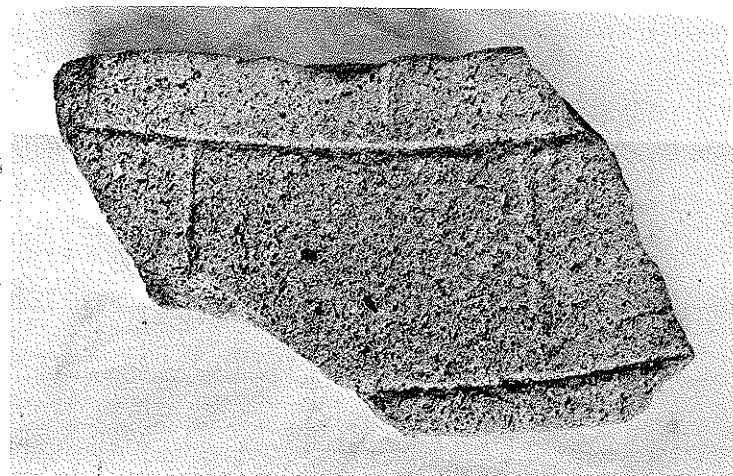
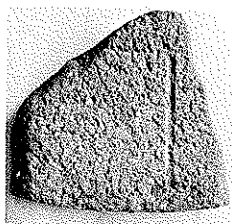
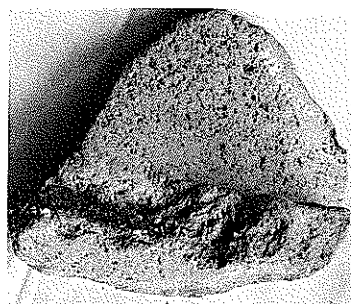
Eトレンチ 墳丘の所有者の境界より東へ17m、幅3mのトレンチを設定した。ここも地山を削りだして墳丘基底部とし、墳丘の東端は所有者境界より東へ7.3m、標高は66.40mで、墳丘は外景観察より一周り大きく、墳丘の高さも9.4mを測る。

トレンチ北壁の土層は約30cmの表土の下に約20cmの腐植土の第Ⅱ層があり、第Ⅲ層は赤褐色土で、砂質と粘質の上下2層に分けられる。第Ⅳ層は地山直上にあって厚さ15cmの暗褐色土層がほぼ水平に東にのびていた。このトレンチ内は各所にゴミ穴があり、陶磁器片や瓦が混入しており、なかには地山に達するゴミ穴や溝跡と思われるものが存在した。Eトレンチ内には周隍と思われるものは認められないが、暗褐色土を旧地表とみれば、Wトレンチと同じようなテラス状の外周をなしていた可能性が強い。

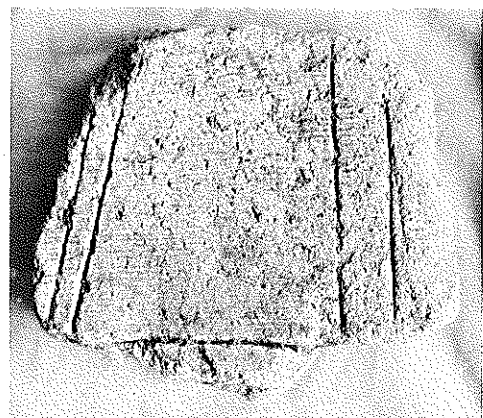
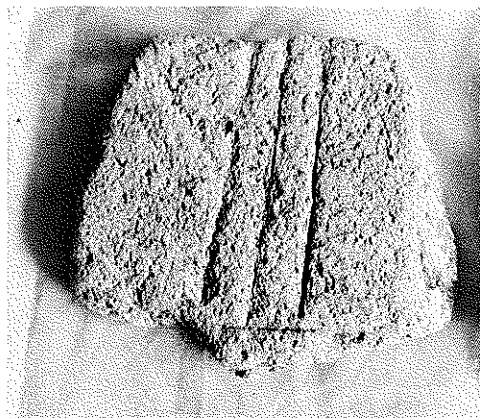
蓋形埴輪 (其の1)



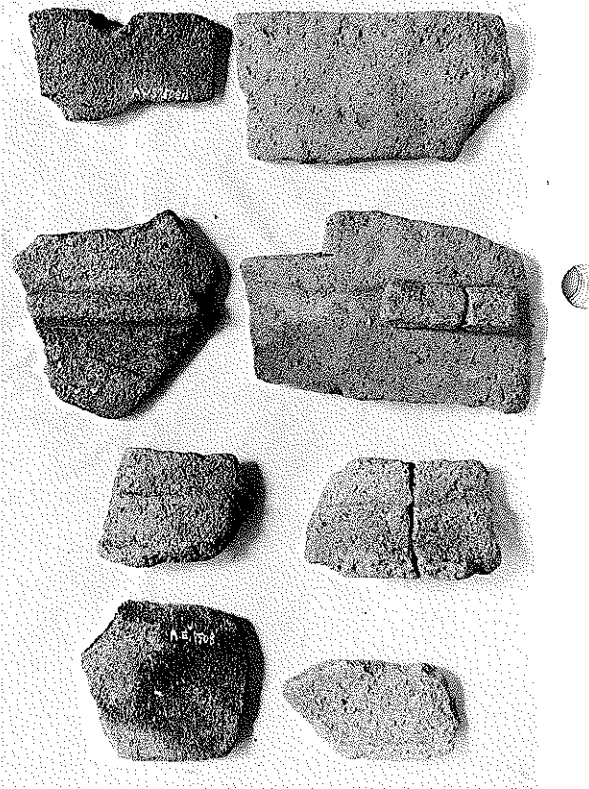
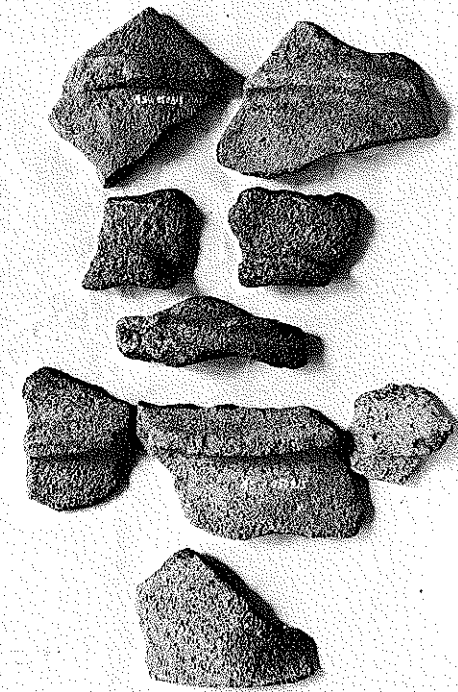
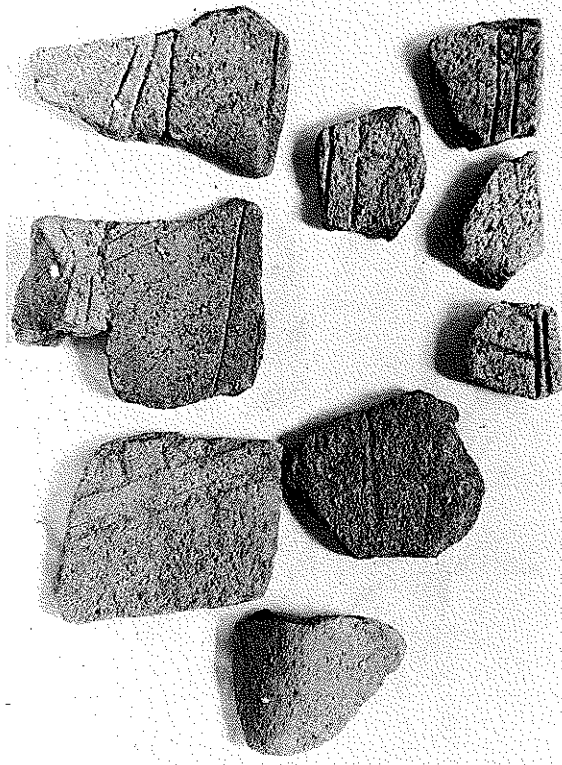
蓋形埴輪 (其の2)



形象埴輪 (其の1)



形象埴輪（其の2）



円筒埴輪

近世墓遺構 東部地区の墳丘裾には、地山にほりこむピットが5ヶ所検出された。No.1ピットは東西83cm、南北1mの方形プランで、地表がけずられているため本来の深さは不明だが現状は30cmを測る。底部遺構のみである。ピット内からは遺物は検出できなかった。

No.2はNo.1の南にあって、墳丘裾の斜面に掘りこむ隅丸長方形で、東西35cm、南北60cm、現在の深さは25cmを測る。ここからは遺物の検出はできなかった。

No.3はEトレンチの墳丘斜面にあって、北端は既掘で消失していたが、南北に長い不整形のピットで、南北90cm、東西45cm、現在の深さは15cmである。これも遺物は検出できなかった。

No.4は墳丘裾を切りこむ大きな土場で、南北10m、東西7m、深さ30~50cmの方形をなし、土壌内には陶磁器片が混入している。最下部の床面からは巴文を主文とし外区に珠文を配する軒丸瓦1点が出土した。この土壌が何であったか判然としないが、ゴミ穴の可能性が高い。

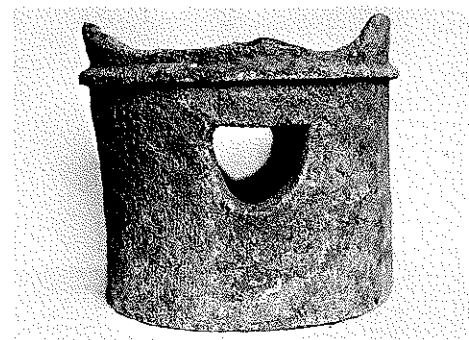
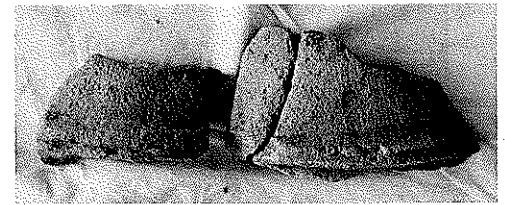
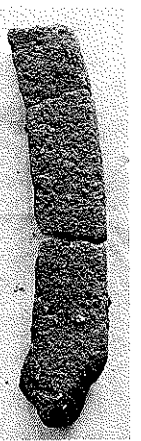
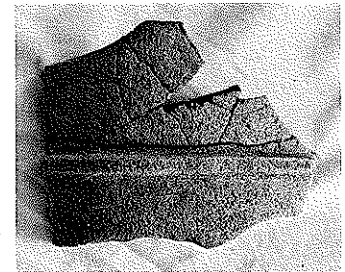
No.5は排土の結果、南北に細永く続き下水溝の跡ではなかったかと思われる。溝状遺構の南部は切られ礫や陶磁器が混入するゴミ穴が存在した。

西部地区ではWSトレンチの西側の墳丘裾で近世墓の墓壇2基を検出した。No.6はNo.7を切っており、No.6が古く、No.7が新しい墓壇であることがわかる。No.6は南北90cm、東西90cmの方形で、深さはあきらかでないが、30cm以上はあったと思われる。墓壇内からは歯牙、下顎骨などの骨片と寛永通宝の銅銭6枚が検出された。

No.7はNo.6の北に重なっていて南北80cm、東西70cmの方形の墓壇に歯牙・骨片のほか、寛永通宝の銅銭7枚と環状鉄製品、鉄釘が検出された。

No.6・No.7の墓壇はその大きさや鉄釘の出土からみて火葬骨を木製容器に納めて埋葬した江戸期の墓で、墳丘西裾に立地する墓石や五輪塔の火輪、水輪が地表に転がっているものと関連し、大久保村当時の地目が墓地であったことも近世墓遺構と関係深いことを推察させる。

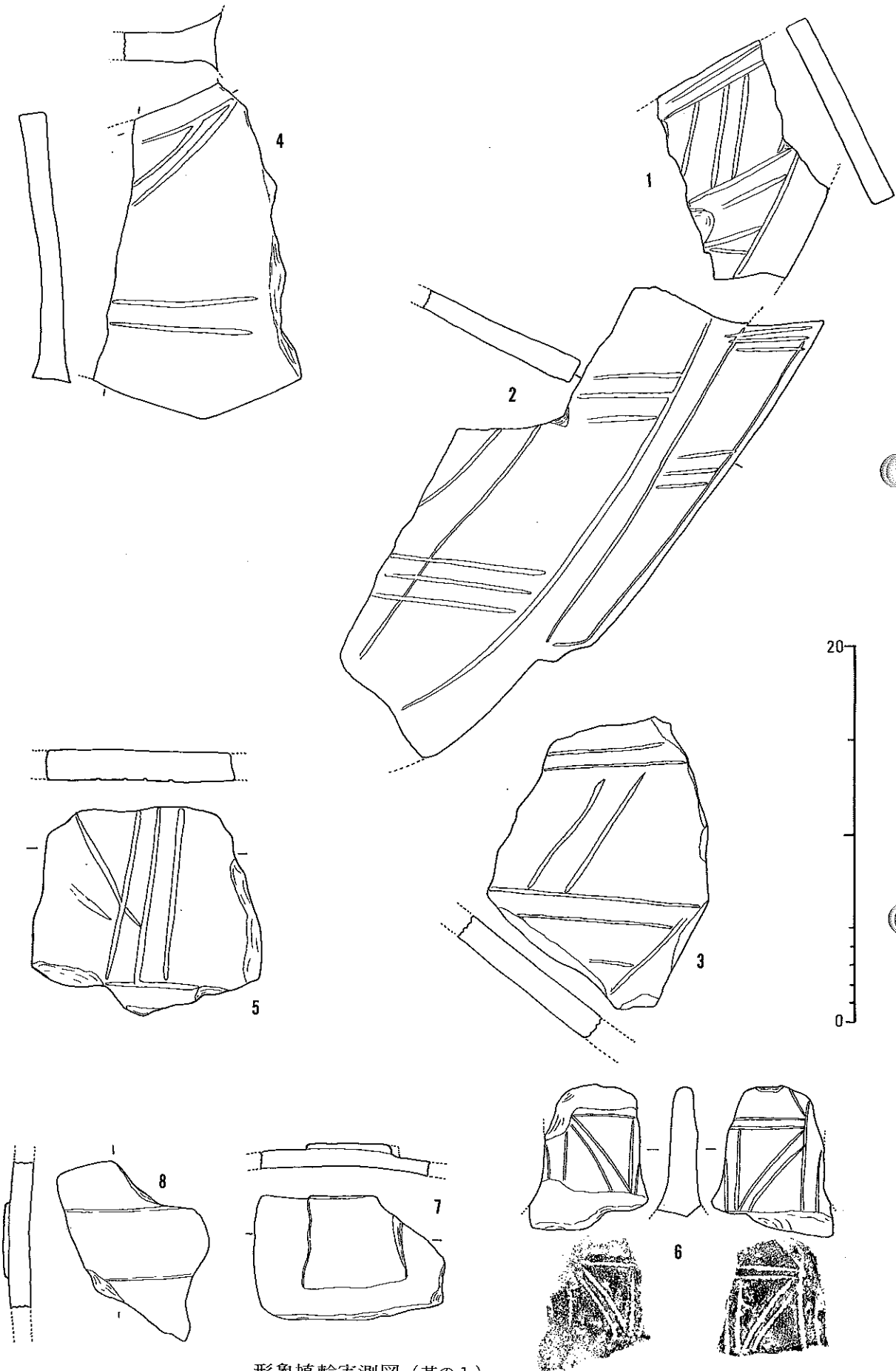
出土遺物 調査にともなって出土した遺物は古墳関係のものと、近世遺物に二分される。古墳関係の遺物はすべて埴輪であり、近世遺物は墓壇出土のものと陶磁器類・古瓦である。



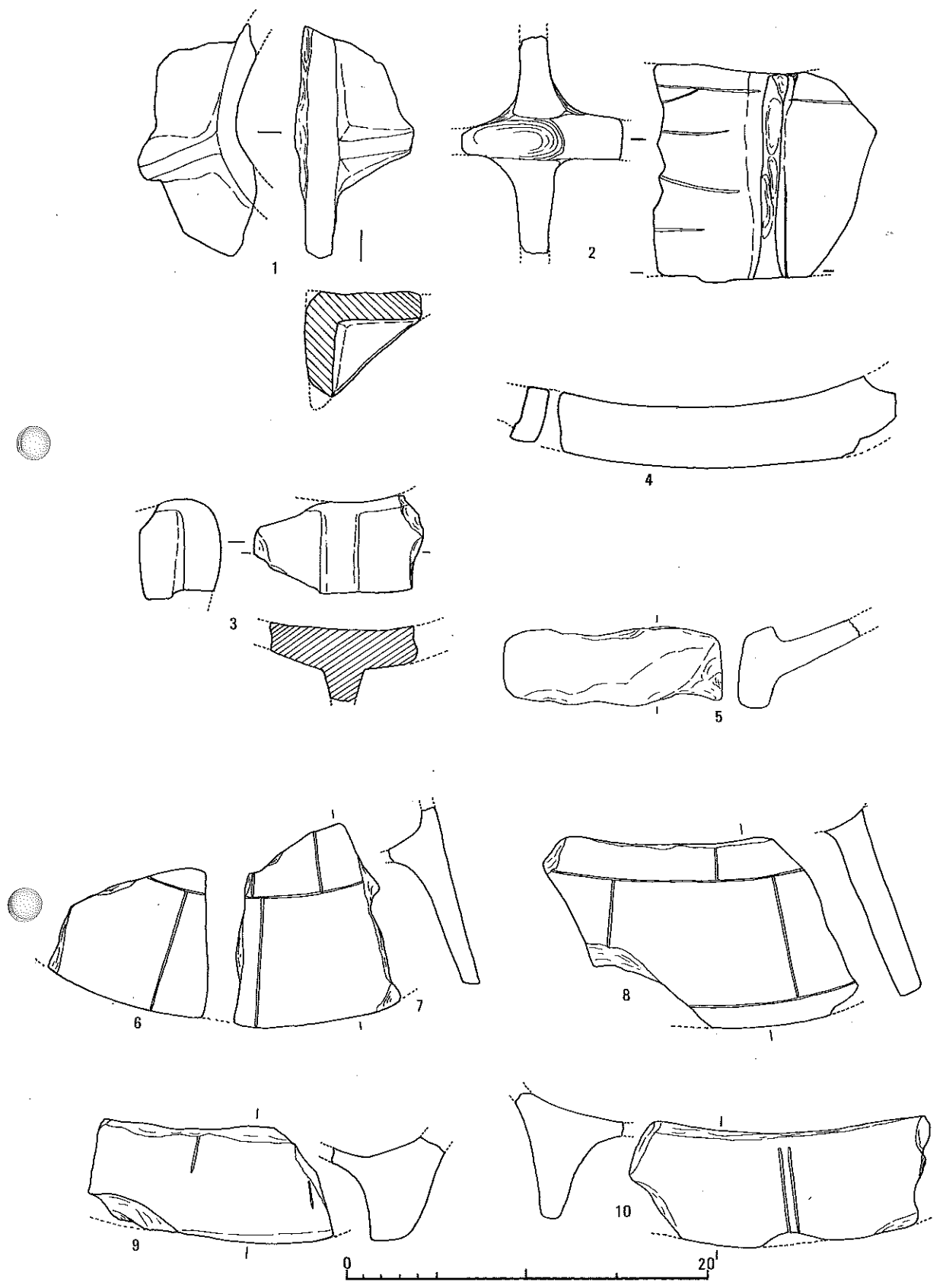
円筒埴輪（Sトレンチ出土）

古墳関係遺物 蓋形埴輪はいずれも破片で別個体であるが、線刻の文様を両面にもつヒレの部分、ヒレが4枚に分かれる基部、ヒレを受ける笠部の中心部、同心円状の線刻がある笠部の破片がみられる。**その他の形象埴輪** 表面に直弧文の一部と思われる線刻のある器形不明の破片や貼付けの突帯の破片ではないかと思われるものがある。

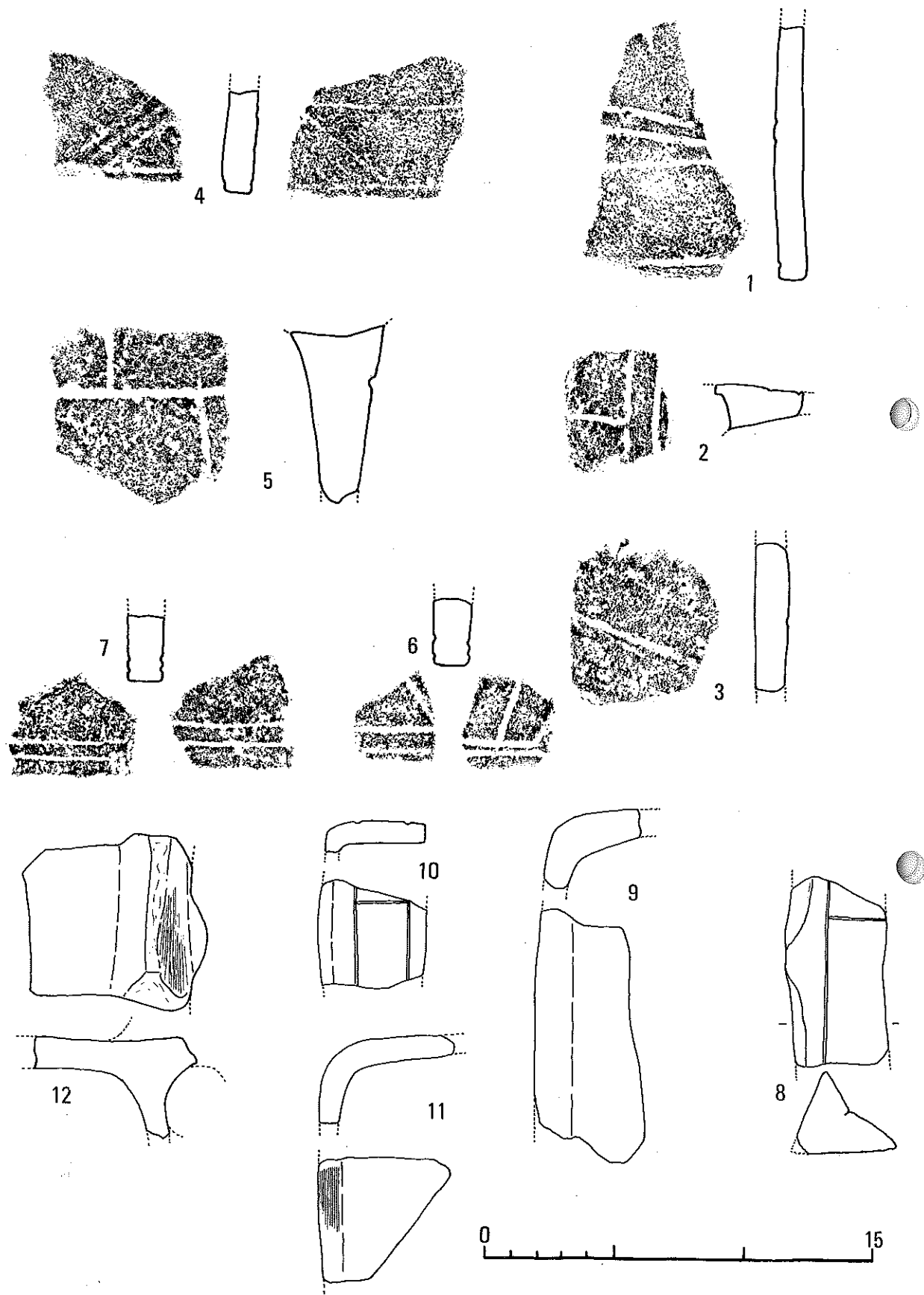
朝顔形埴輪 破片の中から図上で復原すると大形で厚手の朝顔形埴輪と小形で薄手の朝顔形埴輪の2形式がみられる。大形のは口縁径約48cmが図上で復原できる。**円筒埴輪** Sトレンチの葺石の中に原位置を保っていたのは第1段のタガ以下で、直径20cm、厚さ1.2cmを測る。第1段にけられた透し窓は円形をなさず、上縁は水平で下縁はU字形をなし、古式の埴輪の伝統を残していると思われる透し窓である。円筒埴輪の破片の中には直径にかかわらず、0.6cmの薄手のものと1.5cmの厚手のものの2形式がみられる。



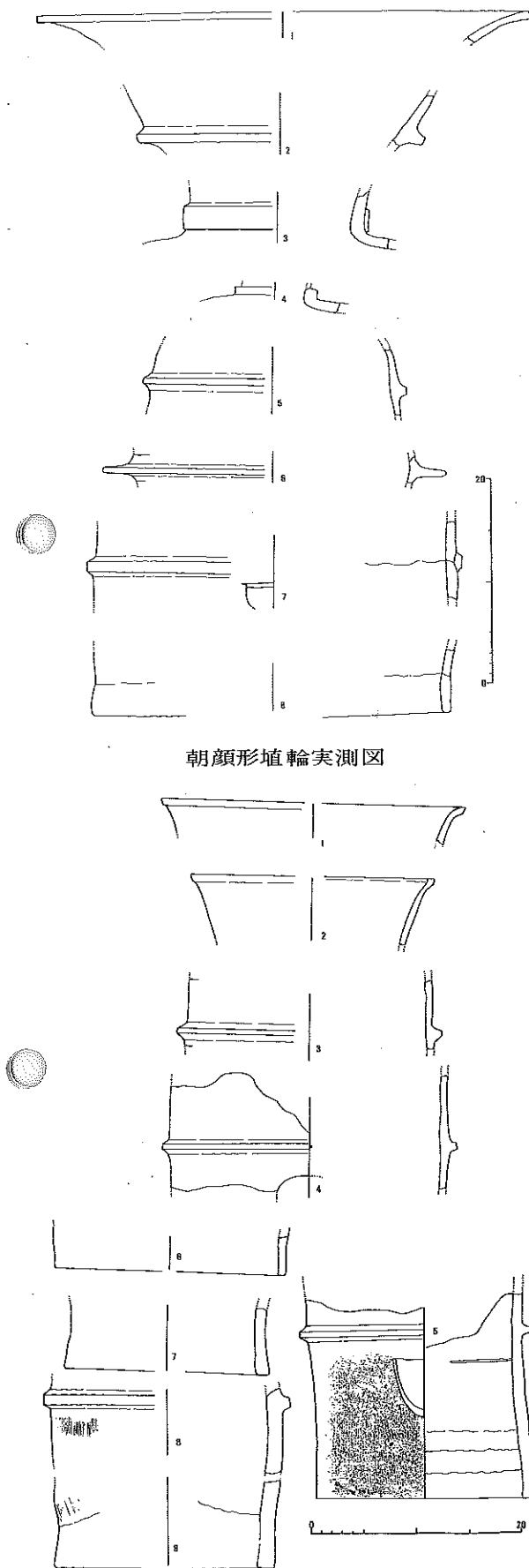
形象埴輪実測図（其の1）



形象埴輪実測図（其の2）



形象埴輪実測図 (其の3)



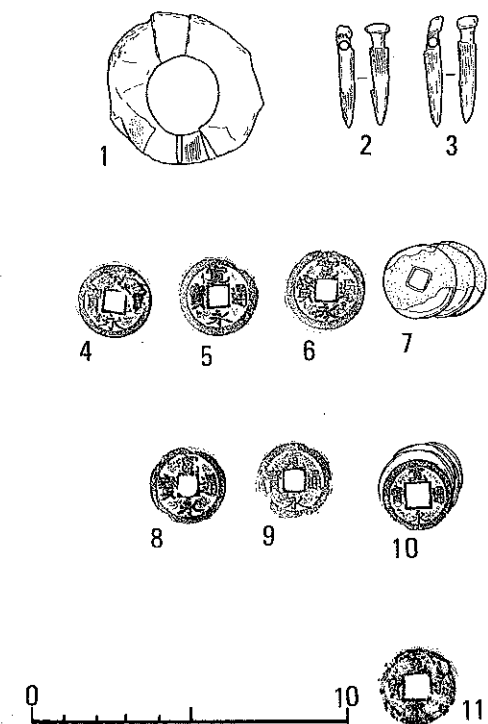
朝顔形埴輪実測図

円筒埴輪実測図

近世遺物 環状鉄製品 No.7 墓塚出土の遺物で直径4.7cm、幅1cm、厚さ0.2cmの環状の鉄製品で、革状のものや漆状のものが錆着している。用途については不明である。鉄釘 No.7 墓塚より出土した2本で、長さ3.2cmと3.5cmの犬釘であり、身には平行する木目が付着して、厚さ0.8cmの板の継目をとめていたと観察される。銅銭 No.6 墓塚より6枚、No.7 墓塚より7枚出土した。双方ともに同一種の寛永通宝である。

鉄銭 東部地区の攪乱層で鉄銭1枚が出土した。錆がいちじるしいが、寛永通宝と判読できた。

陶磁器類 表土および攪乱層から出土したものであるが、大形の皿の破片は山水画の滝の部分を描く染付であり、割れ目を2ヶ所漆でつなぎあわせてある。鳳凰と草花を描く染付の碗の蓋には萬曆年製の銘があり中国の明代のものかと思われる。黄土色をした陶器の抹茶茶碗や古風な松竹梅を描く染付の玉露用の茶碗があり、玉露用の茶碗には豊〇の銘がみられる。他に厨房で使用されたとと思われる甕類、すり鉢類の他に灯明皿、小花瓶、白磁の兔の小焼物などが出土している。



近世墓出土遺物 (11は攪乱層出土)

まとめ 今回の発掘調査は庵寺山古墳周辺の広野団地造成工事にともなうもので、古墳の墳丘そのものは現状のまま保存し、周辺の地下遺構を調査することが目的であった。したがって庵寺山古墳の実態は依然として不明であり、多くを述べる事ができない。今回の発掘調査によって明らかになった事実と若干の問題点のみを述べてその責務をはたしたい。

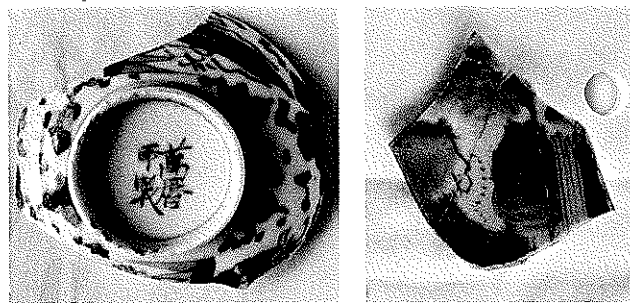
1. 城南高校地歴部の外形測量による墳形と規模は一辺約40mの方形基壇の上に直径約26mの円墳がのる高さ6.5mの墳丘ではないかと観察されていたが、今回の調査の結果では、墳丘裾は高さ1m、幅約1.5mの段築状に地山を削りだしている。ここを墳丘基底部とみると古墳の規模は直径約56m、高さ9mの円墳が復原される。墳丘の裾には幅5~7mの葺石帯がめぐっており、この葺石の端を古墳基底面の端と考えれば古墳の直径は10~14mとさらに一周り大きくなるが、E・W両トレンチでは葺石の帯は確認することができなかった。また、この葺石の中央には蓋形を含む埴輪円筒列が存在した可能性があることも加筆する。

2. 墳丘の南部地域は地山を削って墳丘基底部をつくりだしているが、北部地域は盛土によって墳丘を築造したと思われる。南部の地山を削った跡は幅9m~11m、深さ1.1mの周隍となるが、この周隍は墳丘を一周せず、北半部では周隍の底とほぼ同じレベルの、そしてまた同じ幅のテラスとなる。この周隍とテラスは丘陵上に古墳を築造する際に生じた築造上の実利的一面も考えられるが、他の面では古墳の外部施設であって、墓域を劃する精神的、宗教的意味をもっていたとも考えることができる。

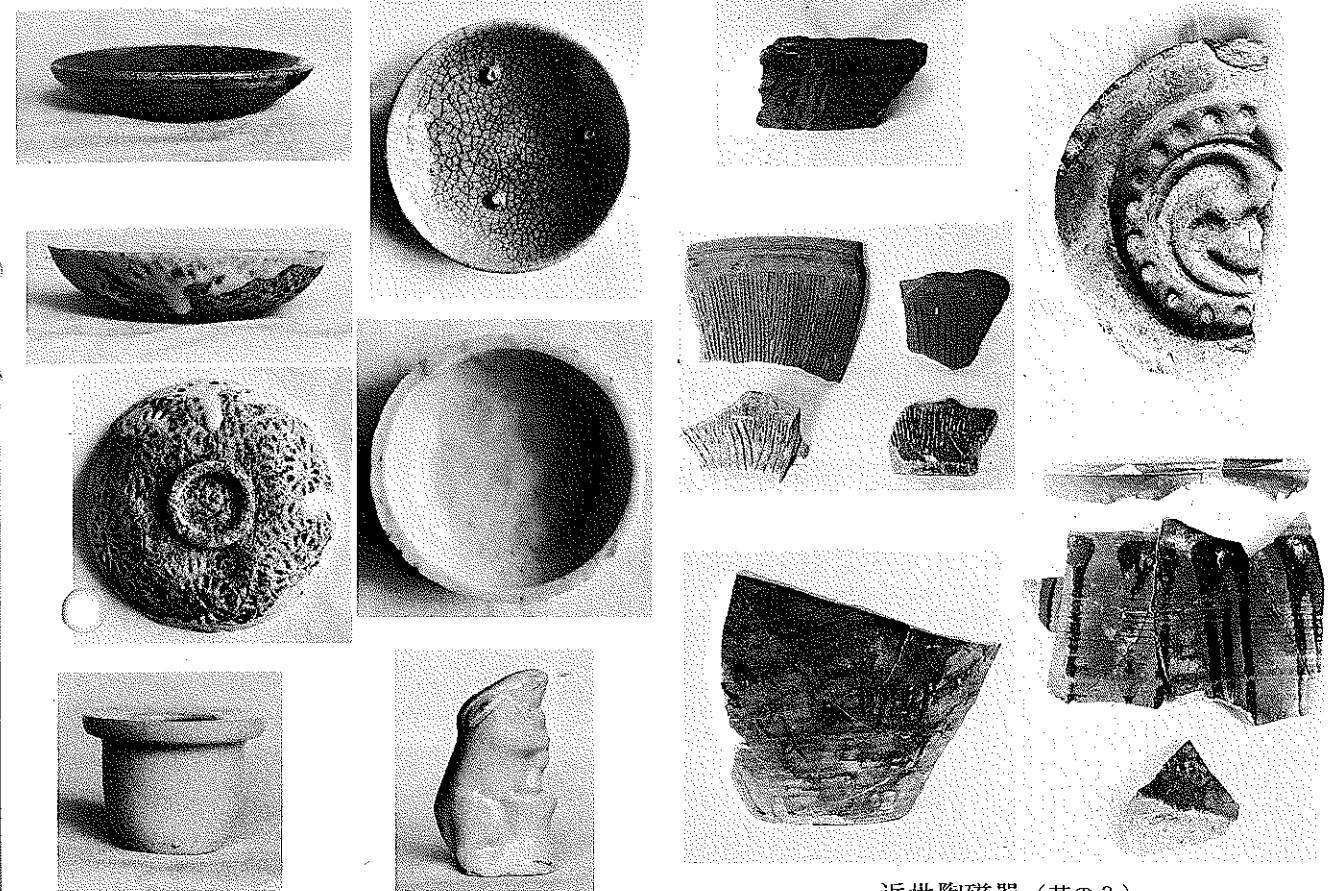
周隍とテラスを外部施設とする古墳は久津川古墳群の丘陵端に築造された古墳に共通してみられ、尼塚・狐塚の方墳や金比羅山古墳の円墳に顕著で

ある。金比羅山古墳は庵寺山古墳と同じ名木川の谷沿いに立地する古墳で、墳形・規模・形象埴輪の存在からみて最も近似し、同系列の時期的にも前後する古墳ではないかと注目される。

3. 古墳の名称が示す通り、この地域にはかつて寺院が存在していたという伝承がある。墳丘周辺で出土した近世遺物の陶磁器には抹茶・玉露用の茶碗をはじめ、「明」の万暦銘の蓋や金漆で割れ目をつなぐ皿の破片があり、一般庶民の日用雑器とは異なる。墳丘裾に転がる五輪塔および寛永通宝を副葬する江戸期の墓の存在や旧地目の墓地などからみて、古墳の近くに近世寺院跡が存在した可能性は強い。

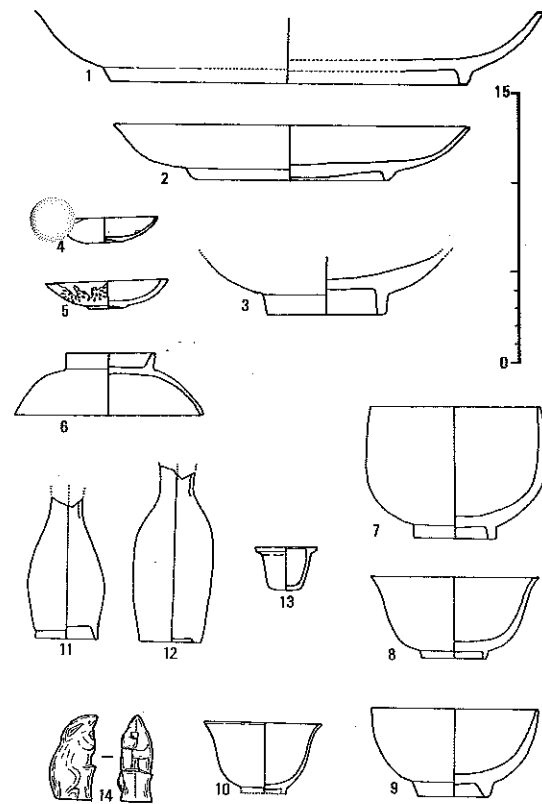


近世陶磁器 (其の1)

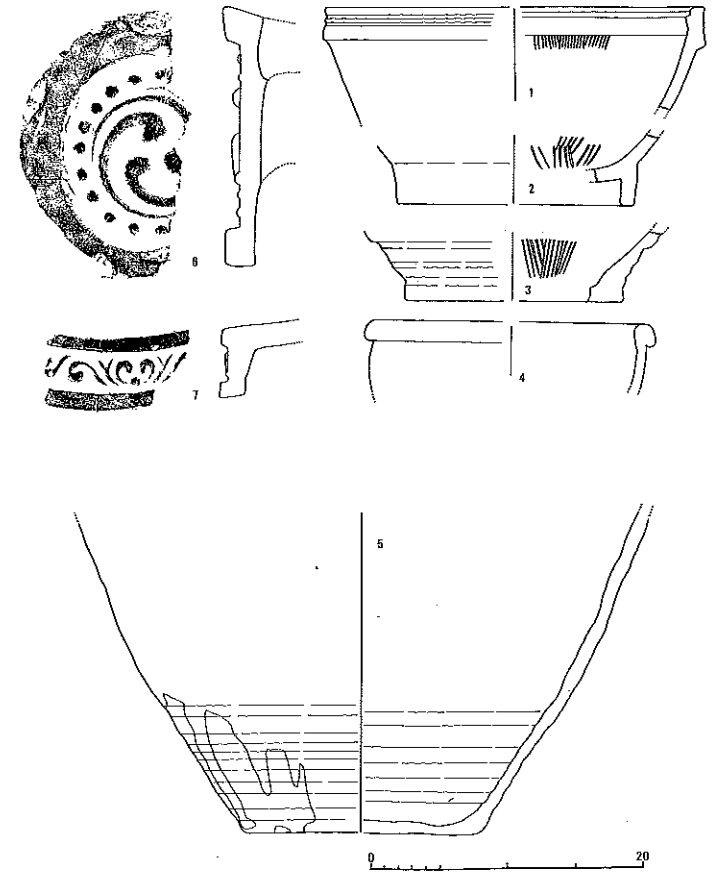


近世陶磁器 (其の2)

近世陶磁器 (其の3)



陶磁器類実測図 (其の1)



陶磁器類実測図 (其の2)

調査組織

庵寺山古墳周隴調査会

会長 宇治市教育長 依田孝一
事務局 同 社会教育課長 杉本敬一
同 社会教育課 服部和一

調査の担当および調査参加者

城南高校教諭 山田良三
花園大学OB 増田一裕

城南高校地歴部 北野 均 一岡真理子 奥村文代 岡本牧子 小野恵子

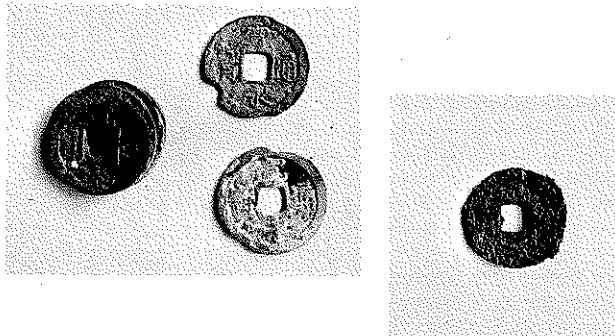
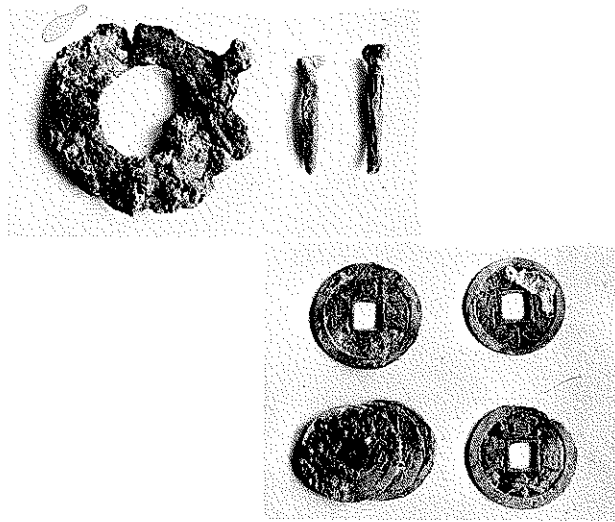
早稲田大学学生 岩崎恭典 芦屋大学学生 中川慶太郎 家政短期大学学生 山田多紀代

花園大学学生 占部宝次 西沢守彦 馬込純一

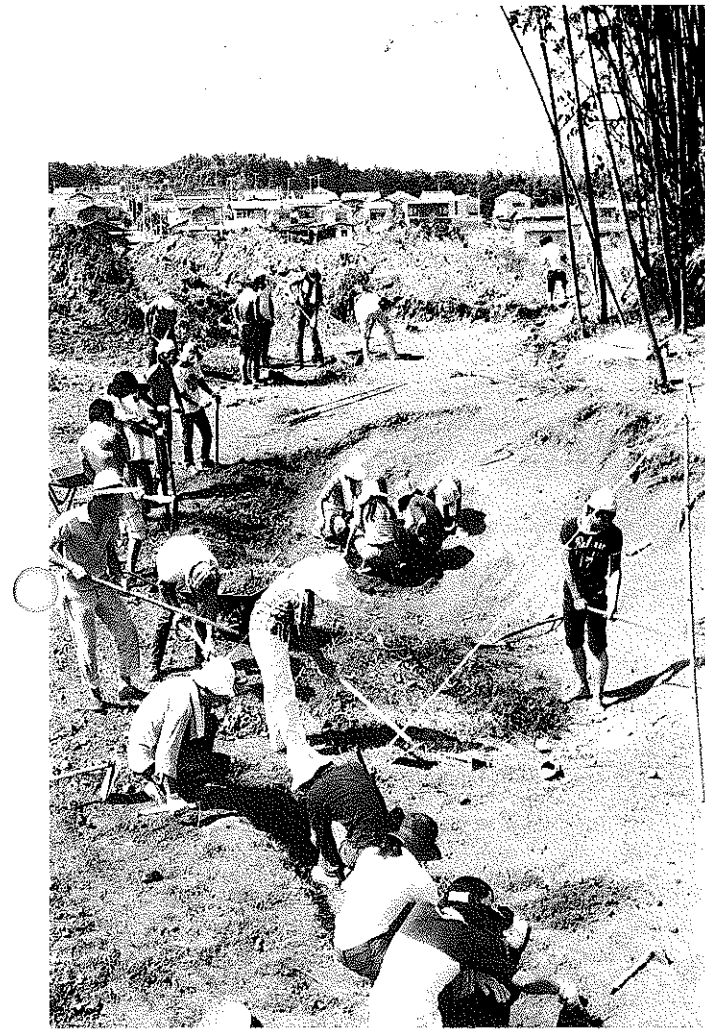
荒木利彦 竹原一彦 森本美保 永瀬俊理 岡崎研一 西本登喜夫 石田千秋 岡田芳彦 角田拓英 上崎博孝 並河雅也 上原和雄 内海伸昭

平野 明 渡辺弘明 松岡美容 草部祐貴久 笹井由起夫 田原かずよ 住谷久江 坪本幸三 吉村恵郎 堤 豊宏 古田加寿子 吉田義信 森沢昌司 谷田文男 治田勝代 中川雄彦 長谷川聡

北条 斉 白土 仁 上村清隆 (順不同)



近世墓出土遺物



あとがき

本報告は広野団地造成にともなう庵寺山古墳周隴部の発掘調査の記録である。調査にあたっては埋蔵文化財の重要性を理解され、墳丘保存計画のもと発掘調査から事後の整理・報告書の刊行まで経済不況の苦しいなかで全面的に協力援助を給った小林建設・日本タクシー・寝屋川建設・前田道路(五十音順)の諸社に対し厚く謝意を表します。また、本調査の事務を担当し、調査が円滑に進行するよう公務多忙のなか種々配慮を給った宇治市教育委員会の諸氏および、真夏の旱天のもと流汗淋漓して最後まで作業を遂行した学生諸君に対し心から敬意と謝意を表します。

執筆者 山田良三